

晴れた空に祖母を思う

南城市立玉城中学校 一年

幸喜 汐里

晴れたゴールデンウィーク最後の日、毎年のように私は祖母の家に行った。そして祖母はいつものように優しく私に戦争の話をしてくれた。祖母の戦争の話はこれまでもあまり聞いた事がなかったので、私は少し緊張していた。

祖母が八歳の時、戦争は始まった。当時祖母の両親は本土に行っていたため、親戚六名で逃げたそうだ。初めは馬小屋。でも爆弾が落ちて一人亡くなり、ここは危険だと、叔父さんに手を引かれて、やっとのことで近くの海の崖の隅に隠れたという。しかしそこにも大きな爆弾が。そして、八歳の祖母一人を残し、親戚全員が命を落としたという。あつという間の出来事だったが、祖母も怪我を負い一人さまようこととなった。

傷口からはウジ虫がわき、草の葉を使って落とすものの、次から次へと自分の体からわいて出てくるウジ虫を必死で落とした。八歳の子どもが、目の前で家族を失い、傷を負い、さらに自分の体からわいて出るウジ虫を一生懸命振り落とそうとしている姿を想像すると、私の胸はズキズキと痛み、涙があふれてくる。そんな体験をしたのが、今私の目の前にいる、優しい祖母だなんて。信じられない気持ちだ。そして、そんな体験を昨日のことのように忘れられないという。

家族を失うとはどんな気持ちなのか。私は以前にもう一人の祖母を亡くしたことがあり、そのときは悲しくて悲しくてたまらない気持ちになった。状況は違っていたかもしれないが、少し祖母の気持ちに寄り添うことができたと思うと嬉しい。戦争体験の一部を共有できた気持ちだ。

当時怪我をした場所を見せてもらった。それらは四か所にもわたり、傷口がふさがっているがへこんだまま、当時のウジがわいて出た様子を想像できた。

痛かっただろうなあ。怖かっただろうなあ。私の大切な祖母をこんなに傷つけた戦争が憎くなってきた。そこで心に大きく傷を残した戦争を許せない。私は、優しく語る祖母をこれからもずっと大切にしたいと思った。

一人になった祖母はしばらくさまよい、ある日アメリカ兵につかまり病院へと連れて行かれたそうだ。その後は孤児院へ。しばらくそこで過ごし、また玉城の親戚のもとへと連れてこられ、祖母の叔母さんに育てられた後に祖母の母親が本土から帰りやっとな一緒に暮らしたという。しかし、好きだった父親は戦死していたそうだ。

祖母は、この沖縄戦で、体も心も傷ついた。それは祖母だけに限らず、沖縄戦を体験した全てのひとにいえることだろう。祖母は最後に私にこんなことを言った。

「自分を大事に生きること。」

戦争を体験した祖母の言葉は重い。でも、その重みをしっかりと私の心で受け止めて、どんなことがあっても、自分自身を大事にして、生きていきたいと思っている。そして、祖母の願いである「戦争をしない、させない」こと。そして世界の平和のために、私が今できることは、身近にいる人を大切に、仲良くし、優しい言葉を使い、そして、自分を大事に生きることだ。それに気づいた今、休日の晴れた空を見上げると、優しい大好きな祖母の笑顔が思い出される。また、祖母の話聞きたくなってきた。